

いちごのナミハダニの雌成虫の薬剤感受性検定

栃木県農業環境指導センター

1 検定方法

(1) 供試虫

平成20年2月に県内8地点のいちごほ場からナミハダニを採集し、個体群毎にインゲンマメ葉で累代飼育したものをを用いた。

(2) 供試薬剤

表1 検定に用いた薬剤

商品名	薬剤名
コロイト水和剤	ミルベメクチン水和剤
コテツフロアブル(K社製)	クロルフェナビル水和剤
マイトコーネフロアブル	ビフェナゼート水和剤
カネマイトフロアブル	アセキノシル水和剤
ダニサラバフロアブル	シフルメフェン水和剤
ダニトロンフロアブル	フェンピロキシメート水和剤
ピラニカEW(K社製)	テブフェンピラト乳剤
サンマイトフロアブル	ピリダベン水和剤
アファーム乳剤	エマメクチン安息香酸塩乳剤
粘着くん液剤	テンボン液剤
アカリタッチ乳剤	プロピレングリコールモノ脂肪酸エステル乳剤
サンクリスタル乳剤	脂肪酸グリセリド乳剤

(3) 検定方法

ナミハダニ雌成虫をインゲンのリーフディスク(直径3cm)に20個体ずつ接種し、水道水で規定の濃度に希釈した薬剤を、2~3mg/cm<sup>2</sup>になるようにハンドスプレーを用いて散布した。対照として水道水を使用した。

薬剤処理から2日後に生死を判定した。

2 結果の概要

- (1) マイトコーネフロアブル、アファーム乳剤では効果は高かった。
- (2) カネマイトフロアブル、ダニサラバフロアブルでは比較的効果は高かったが、ばらつきがあった。
- (3) コロイト水和剤では全般的に効果はやや劣ったが、高い地点もあった。
- (4) コテツフロアブル(K社製)、ダニトロンフロアブル、ピラニカEW(K社製)、サンマイトフロアブルでは効果は低かった。
- (5) 粘着くん液剤では比較的効果は高かったが、ばらつきがあった。アカリタッチ乳剤では効果は認められるが、その程度は低かった。サンクリスタル乳剤では効果は低かった。

表2 いちごのナミハダニ雌成虫に対する各種薬剤の補正死虫率(%)<sup>1)</sup>

商品名	希釈倍率 (倍)	各地点の補正死虫率(%)								平均値 (%)
		1	2	3	4	5	6	7	8	
コロイト水和剤	2000	66.7	73.2	56.4	87.1	73.5	57.5	51.4	47.5	64.2
コテツフロアブル(K社製)	2000	64.9	8.5	25.5	28.1	17.9	14.8	44.1	32.2	29.5
マイトコーネフロアブル	1000	100.0	100.0	100.0	98.2	96.6	90.6	76.4	72.5	91.8
カネマイトフロアブル	1000	65.5	100.0	100.0	100.0	72.8	50.9	58.6	100.0	81.0
ダニサラバフロアブル	1000	100.0	54.4	65.6	83.3	73.6	60.0	58.2	95.0	73.8
ダニトロンフロアブル	1000	16.7	12.5	63.5	29.3	50.5	40.9	22.5	19.7	31.9
ピラニカEW(K社製)	2000	23.7	1.6	17.6	34.6	12.1	19.4	31.0	5.1	18.1
サンマイトフロアブル	1000	40.3	9.5	25.7	54.3	22.9	20.0	40.7	44.9	32.3
アファーム乳剤	2000	94.9	100.0	98.4	98.3	96.7	95.3	92.1	89.7	95.7
粘着くん液剤	100	89.8	70.2	67.4	77.4	72.4	72.9	75.2	61.6	73.4
アカリタッチ乳剤	1000	46.3	56.7	45.1	66.7	52.4	29.3	82.7	57.9	54.6
サンクリスタル乳剤	300	39.7	29.9	26.6	35.0	69.0	55.8	34.9	55.5	43.3
対照区 <sup>2)</sup>		(100.0)	(96.7)	(98.3)	(98.3)	(98.3)	(100.0)	(98.4)	(98.3)	(98.5)

注1) 補正死虫率(%) = (対照区生存虫率 - 処理区生存虫率) / 対照区生存虫率 × 100

苦悶虫は死亡虫に含み、逃亡虫は供試数から除外する

注2) 対照区の( )は生存虫率(%)を示す